

第42回原子力委員会定例会議議事録（案）

1．日 時 2002年10月29日（火）10：30～11：40

2．場 所 中央合同庁舎第4号館7階 共用743会議室

3．出席者 藤家委員長、遠藤委員長代理、木元委員、竹内委員
内閣府

永松審議官

後藤企画官（原子力担当）、渡辺参事官補佐

経済産業省 原子力安全・保安院

原子力防災課 山下課長

原子力発電安全審査課 佐藤統括安全審査官

原子力安全委員会事務局

総務課 川原田課長

4．議 題

- （1）東京電力株式会社福島第一原子力発電所1号機における格納容器漏えい率検査の偽装について（原子力安全・保安院）
- （2）内閣総理大臣を通じた経済産業大臣に対する「原子力安全の信頼回復に関する勧告」について（原子力安全委員会）
- （3）市民参加懇談会 in 東京について
- （4）核燃料サイクルについて
- （5）原子力委員会参与及び専門委員の変更について
- （6）藤家委員長の海外出張報告について
- （7）その他

5．配布資料

資料1 東京電力株式会社福島第一原子力発電所1号機における格納容器漏えい率検査の偽装について

資料2 原子力安全の信頼の回復に関する勧告（案）

- 資料3 第2回「市民参加懇談会 in 東京」開催計画（案）
- 資料4 核燃料サイクルに係る今後の検討について（案）
- 資料5 - 1 原子力委員会参与の変更について（案）
- 資料5 - 2 原子力委員会専門委員の変更について（案）
- 資料6 藤家原子力委員長の海外出張報告について
- 資料7 第41回原子力委員会定例会議議事録（案）

6. 審議事項

- （1）東京電力株式会社福島第一原子力発電所1号機における格納容器漏えい率検査の偽装について（原子力安全・保安院）

標記の件について、山下課長より資料1に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

（木元委員）格納容器漏えい率の本当の値は、これから出てくるのか。

（山下課長）今、事業者に報告を求めているところである。

（木元委員）漏えい率の基準値を満足できなかったから不正な操作を行った、ということでは明らかではないのか。

（山下課長）保安規定上、漏えい率が基準値以下であることを確認しなければ、検査に合格することができない。検査時に不正な操作を行ったことにより、漏えい率が確認できていない。確認できないということ自体が保安規定違反である。

（木元委員）この検査は、国が立ち会わなければならないものだが、国の検査官がこのような不正操作を見抜くことは難しいと思うが、検査官は、この検査の結果をそのまま受け止めるしかなかったのか。

（山下課長）定期検査では、検査要領が定められており、主要な弁の開閉等については、国の検査官は中央制御室で検査条件と合っているか確認している。しかし、弁の下流側に閉止板が取り付けであったというような現場の状況まですべてを把握することはできない。また、検査では、15分ごとに記録をとっていたが、圧力の不透明な変動などは見られなかった。今回の場合、補って注入する空気は少量なので、全体の圧力変動はほとんど現れないため、このような不正操作を見抜くことは非常に難しいと思う。

（遠藤委員長代理）本件については、大変遺憾に思っている。原子力の基盤を揺るがしかねないことだが、今後どうしていくのが重要である。まだ他に何かあるのではないかと疑われていると思うので、この機会に徹底的にやってほしい。

（木元委員）平成5年に問題のあった弁を取り替えたと聞いているが、その取り替え

た理由は漏えいがあったから、というような報告はあったのか。

(山下課長) 当該弁は、口径の小さな配管のものなので、国が関与する対象ではなかった。

(竹内委員) 本件は、シュラウドの件とは性格が異なるものであり、明らかに不正な行為である。絶対にあってはならないことである。

(藤家委員長) 再発防止対策は、これまでいろいろとやってきているが、何度も裏切られてきた。今回は規則を厳しくすることだが、果たしてそれだけで済むのか。持続性のある再発防止対策を検討してほしい。

(山下課長) 原子力安全委員会からも、原子力安全の信頼の回復に関する勧告をいただいた。地道に努力して、ゼロから再構築していかなければ、信頼は回復しないと考えている。いろいろとご指導をいただきながら進めていきたい。

(2) 内閣総理大臣を通じた経済産業大臣に対する「原子力安全の信頼回復に関する勧告」について(原子力安全委員会)

標記の件について、川原田課長より資料2に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(遠藤委員長代理) この勧告については、きちんと総理大臣の耳に入るよう取り計らってほしい。

(川原田課長) 先週、細田科学技術政策担当大臣と松浦原子力安全委員長が、この勧告について総理大臣に直接ご説明した。

(木元委員) この勧告は、我々が望んでいること、足りなかったと思うところがきちんと含まれた内容になっている。このような原子力安全委員会の権限を、十分に発揮していただきたい。

(藤家委員長) 資料の「2 . 」について、これまで原子力安全委員会でもいろいろと指針の改訂を行ってきているが、結果が出るまで時間がかかりすぎているという印象がある。指針は時代によって変わっていくものであり、今後は運転時の基準が焦点になると思うが、時間をかけないでまとめていただきたい。

(木元委員) 資料に「最新の技術的知見を反映できるように」とあるが、機械学会などの民間の知見も含めて、ということだと思う。この点についてもきちんと行政庁に伝えてほしい。

(藤家委員長) 私の率直な感想を述べたい。これまで述べてきたことだが、ルール違反を犯した者にはペナルティが課せられる、とうことが大前提である。そこで、まずは、監督官庁である原子力安全・保安院並びに原子力安全委員会がきちんと対応し、報告していただくことが必要である。原子力委員会の任務は、信頼回復に向けて、

というところから始まると考えている。今回の件は、安全上極めて重要な機器に関するものであり、しかも定期検査の中で不正操作がなされたものなので、許せるものではない。東京電力の自主検査に関する不正問題についても、原子力利用を担う者として必要な歴史観や文明観、そこから生れてくる使命感が欠如しているのではないかと、私としては、そのような使命感の欠けている者が原子力利用を行うことの確性を疑うということを指摘した。今回の件も、原子力草創の頃の使命感が欠如していることによるものだと強く感じている。このことは、反面、原子力の利用が技術として一般化してきたことを示すところでもあると考えられる。しかしながら、原子力は、人類文明を前進させる大きな力であると同時に、人類文明を脅かす可能性も有しており、その点、原子力長期計画においてもプラスとマイナスの両面から言及している。この機会に、原子力に関係するすべての者が、草創の精神に立ち戻って、誇りと謙虚さを持つことを強く期待する。

また、今回の件が原子力政策の推進に与える影響を大変に憂慮している。まず、信頼回復を図ることが大前提だが、今回の件は、法律違反であり、ルール違反をした者には、当然ペナルティが与えられるものであることを改めて強く指摘したい。このことは、原子力の基本政策自体が間違っていたということの意味するものではなく、今後克服すべき課題と推進すべきテーマを峻別して見ていかなければならない。さらに、将来にわたるエネルギー確保や環境問題への対応を考えたとき、いかなる現実的な選択肢があり得るのか、我々だけでなく国民の皆さんと一緒に考えていきたい。

原子力委員会は、原子力政策の基本方針や基本理念を示してきている。私は、この基本政策を現時点で崩すことではないと考えているが、基本政策の実施に際して起こっている様々な問題・摩擦について、行政庁で実施している施策の整合を検討し、これからも必要な指針を示していきたい。

(3) 市民参加懇談会 i n 東京について

標記の件について、渡辺参事官補佐より資料 3 に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

(木元委員) 第 1 部でお呼びするパネリストについては、既にお話しさせていただいてご内諾をいただいている。第 2 部の司会進行は、できればコアメンバーの中から二人の方をお願いするつもりである。第 2 部では、会場の参加者からご意見を伺うことが中心になるが、これだけコアメンバーがそろっているので、コアメンバーから、「あなたのおっしゃりたいことはこういうことですか」、「それはこういうことではないですか」、といった質問をしたりして、議論を深めるつもりである。「プログラム (2) 挨拶および報告」では、私から、今回の懇談会を開催するに至った経緯や、東京電力の一連の問題について、時系列に報告する予定である。東京電力や原子力安全・保安院の方にも出席していただく予定だが、もしここで報告したいという希望があれば報告していただくつもりである。ここでは、その時点で何が問題として取り上げられ、どのようなことが行われてきたのかについて説明した上で、

第１部に入っていこうと考えている。

（４）核燃料サイクルについて

標記の件について、遠藤委員長代理より資料４に基づき説明があり、以下のとおり意見交換があった。

（木元委員）国民の皆さんに向けて発信することなので、なるべく分かりやすい言葉を使いたい。最終的には、自分達は具体的にこれをやっていく、というメッセージになるので、資料の「１．目的」をきちんと踏まえた上で進めていくことが重要である。「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」では、福島県のエネルギー政策検討会と同じような方式で、東京でいろいろな方からご意見を伺って、何をお考えで、何を求めているのかなどを中心に、根源的なことを踏まえた上で核燃料サイクルのあり方を巡る問題を抽出していくことが重要である。ここでのご意見を踏まえて、核燃料サイクルの全体像について原子力委員会としての考え方を改めてまとめ、分かりやすいかたちで提示していくことになると思う。そして、年明け以降になると思うが、我々がまとめたものを持って、各地の方々と意見交換を実施する。ここでは、国内を重点的に、我々が核燃料サイクルをどのように考えているのか、その全体像をきちんと示すことが重要である。国外については、必要に応じて意見交換をしていけば良いと思う。

（遠藤委員長代理）国外に対する対応は、国内と並行して行うということではない。来年の春頃になるのではないかなと思う。

（藤家委員長）国外への対応は、主に国際約束（我が国が海外に預けているプルトニウムの返還）を今後どうするのか、ということである。

（藤家委員長）現在、主な個別テーマとして、市民参加懇談会、原子力二法人統合、核燃料サイクルの３つがある。それぞれ適任の委員に担当をお願いしているところである。私としては、必要に応じて相談していくが、各担当委員の考えを最大限に尊重していきたいと思う。積極的に進めていただきたい。

（５）原子力委員会参与及び専門委員の変更について

標記の件について、後藤企画官より資料５に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった後、案通り了承された。

（藤家委員長）いずれの方も、ご本人の希望によるものか。

(後藤企画官) そのとおりである。

(木元委員) 市民参加懇談会の関係では屋山委員がいらっしゃるが、専門委員の方々は忙しい方が多く、市民参加懇談会のコアメンバーも全員が会議に出席することはかなり難しい。今後、コアメンバーの人数を増やすことも検討している。

(6) 藤家委員長の海外出張報告について

標記の件について、藤家委員長より資料 6 に基づき以下のとおり報告があった。

(藤家委員長) 22 日の総合セッションでは、中国の C A E A (中国国家原子能機構) 主席の講演から始まり、I A E A (国際原子力機関)、O E C D / N E A (経済協力開発協力機構 / 原子力機関)、米国の N R C (原子力規制委員会)、日本の原子力委員会と続いた。そして、メキシコや B N F L (英国原子燃料会社) などが続き、その後に韓国の講演があった。

また、同日の原子力委員会定例会議で出した北朝鮮の核開発についての緊急声明についても、私の講演の中で紹介するとともに、講演の後、I A E A や各国の要人に本メッセージのコピーを直接手渡し、協力を呼びかけた。そんなに簡単なこととは考えていないが、日本は真正面から取組んでいく旨説明し、概ね賛同していただいた。

(7) その他

- ・事務局作成の資料 7 の第 4 1 回原子力委員会定例会議議事録 (案) が了承された。
- ・事務局より、11 月 5 日 (火) の次回定例会議の議題は、「第 3 回アジア原子力協力フォーラム (F N C A) 大臣級会合の結果について」等を中心に調整中である旨、発言があった。